

魚釣りをやめて生物多様性に配慮した公園づくりへ
片岡友美(認定 NPO 法人 生態工房)

埼玉県上尾市は上尾丸山公園「大池(2.4 ha)」において、水質改善と外来魚駆除を目的としたかいぼりを 2019 年度に行った。これをきっかけに市民との協働で水辺再生の取組を始めている。演者の所属団体は、市からの委託によりかいぼりイベントの運営と協働のコーディネートを担い、それ以降も現在まで水辺再生の取組をサポートしている。

大池は荒川の氾濫原で、かつては田んぼとして利用されていたが、1978年の開園に合わせて整備された。開園後まもなく、市の上の承の下、誰でも自由に魚釣りを楽しめる池になり、釣り業界団体によるヘラブナ等の放流が定期的に行われるようになった。同園ではかいぼりが行われるまで、魚釣りが楽しめることが公園の特長の一つになっていた。

こうしたなか、2015 年ごろから大池では慢性的なアオコの発生や水質悪化が深刻な問題となっていたため、市はかいぼりによって池の環境を改善する方針を決定した。2019 年度のかいぼり前には、環境保全団体や研究者、環境行政の専門家等による会議を設置し、かいぼり後の大池の姿を改めて協議した結果、ヘラブナ等を含む外来魚類を駆除すること、外来魚駆除にとどまらずかいぼり後も生物多様性に配慮した水辺再生に取り組んでいくことを合意した。このため大池での魚釣りは、都市公園条例に則り、当面許可しないことを決定した(後に 2023 年度から全面禁止)。同園ではかいぼりをきっかけに「釣り堀池」から、生物多様性に配慮した公園管理へ転換したのである。

かいぼりではブルーギル 7141 匹、コイ(飼育型)395 匹、ハクレン 51 匹、チャネルキャットフィッシュ 2 匹のほか、タイリクバラタナゴ、カダヤシ、オオクチバス等を駆除した。コイ(飼育型)とタイリクバラタナゴはかいぼり後に放流された可能性があり現在も少数が確認されているが、他の外来魚は根絶することができた。

同園ではかいぼり後に注目すべき2つの成果があった。1 つは 2020 年からカイツブリが大池で繁殖するようになり、ヒナ連れの姿が見られるようになったこと。開園以来初めての繁殖確認で、同年以降、つがい数が増加している。2024 年には 6 つがいが繁殖した。繁殖するようになった要因としては、外来魚の駆除によって在来の水生生物が回復したこと、営巣場所となる抽水植物が再生したこと、釣り人が岸辺を占有しなくなったことで営巣可能な環境になったことが考えられる。

もう 1 つは市民との協働で外来植物の駆除や浅場づくり等を積極的に行い、湿地の埋土種子からミズアオイ(県レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類)が再生した。こうした取組が評価され、上尾市は 2022 年に(公財)都市緑化機構から第 42 回緑の都市賞<都市緑化機構会長賞>を受賞し、さらに環境省の自然共生サイトへの登録申請を準備中である。

本発表では、上尾丸山公園における自然再生の取組について、その過程や現状を紹介し、既得権にとらわれずにネイチャーポジティブに転換していく活動のポイントを解説する。